

ラオスからの感謝状 私の心の故郷

昨年度に引き続いて本年度もラオスの教育省の招聘を受けて、1999年11月22日から2か月間ラオスの首都ビエンチャンにある教育省・国立教育研究所で理科教育発展のために協力してきた。依頼された業務内容は小・中・高校の理科のカリキュラム開発、教科書作成、教師用指導書作成、実験観察教材開発、授業方法改良であった。

ラオスは1975年の革命で王政を廃して社会主義国家の道を選んだが、旧ソ連の崩壊で経済政策が揺らぎ、1986年から経済解放化政策を導入した。しかしながら、今だに農林業と手工業に依存し、その産業基盤は脆弱である。そこで、ラオス政府は新世紀を迎えるに当たって、世界の科学技術水準に追いつくために、理科教育のカリキュラムや教科書の抜本的な改正の必要に迫られ、この要請となった訳である。

優秀なラオスの教科調査官とカリキュラム開発官7名が日夜協力してくれたので、昨年度は小・中学校の、本年度は高校のカリキュラム等の案を完成させることができた。特に本年度は生徒の個性を活かすために、高校の理科のカリキュラムを理系と文系の2本立てにすることにし、その教育目標と指導内容を成文化した。

また、改良方針を示して案文を作成させている合間をぬっ



受取った感謝状

て、飛行機や車で都市部や山間部の小・中・高校、さらに教員養成大学をも訪ねて授業分析や教科指導を行なった。

さらに、請われて教育省で「日本の理科教育の現状と指導要領の改正」「ラオスのカリキュラムの問題点と教員養成の今後へ向けての提言」の講演も行なった。

これらの功績に対して、このような感謝状を教育省・教育研究所から受領した。

ラオス国民一人当たりのGNPもエネルギー消費量も日本人の100分の1で、経済的には決して豊かでないが、心は100倍豊かで、人々は優しい。国中に笑顔が満ちていて、実に幸せそうに暮らしている。前回同様に今回も嫌な思いをしたことは、只の一度もなく故郷に帰ったような安らぎを常に感じていた。「幸せは金では買えない」という大切なことを教えられたようだ。

しかしながら、科学技術振興のための基盤作りをしていて、これが本当にこの人達をより幸せにするだろうか。却って不幸せにしないだろうか、という危惧を常に感じていた。私には「幸せとは何か」は分からないが、せめて、5才になるまでに5人の内1人の子が死に、人口の4分の1しか安全な水が飲めず、平均寿命が53歳という悲しい現実が改善されるだろうと、自分の行為を正当化して業務に励んだ。

板坂 修（滋賀大学名誉教授）



ビエンチャン高校で「生物」の授業参観中の筆者



ラオスの教育省の高官らと教育改革について懇談

附属学校から

ネットデイサミット'99 ワークショップin滋賀を開催

教育学部附属小学校・附属中学校において、平成十一年十二月十八日（土）から十九日（日）にかけて、財団法人コンピュータ教育開発センター（CEC）との共催で開催され、ネットワークショップセンターinかんさい（N e S K）のメンバーを中心としたボランティアの方々、教育学部学生、附属小学校・附属中学校の教員並びに保護者、附属中学校科学班の生徒など、東京や兵庫からの参加も含めて一五〇名余の参加者があった。

十八日（土）の午後には、実施技術講習会が開催され、十九日（日）には、今冬の強い寒波の下、LANケーブルの成端技術講習会をはじめ、附属小学校・附属中学校両校の普通教室などへの配線、情報コンセントの設置のための作業が行われ、参加者はネットワークの基礎知識とともに、配線や情報コンセントの設置などの実技もともに学んだ。

附属小学校・附属中学校とともに、校内にある全てのコンピュータからインターネットへの接続ができ、教科の学習や総合学習など、それぞれの児童・生徒の学習の状況に応じて活用できるネットワーク環境にある。さらに、今回、校内の全ての教室に情報コンセントが設置されたことは、校内のデータの共有化を図ることが可能となるなどコンピュータの活用の幅が広がり、教科や総合学習、情報教育を進めていく上で、両校にとって画期的なことである。

報道された主な記事（12月・1月）

十二月

- * 全国小・中学校作文コンクール中央審査入選 上田季子さん(附属中学校)〔読売(十二・一)〕
- * 県内初「ネットデイ」 附属小・中学校(京都(十二・四)他)
- * 「びっくりアートフェスティバル」 附属小学校で開かれる〔朝日(十二・六)〕
- * 「現代の経営」講義行われる〔朝日(十二・一〇)〕
- * 地球環境教育論 川嶋宗継教授(毎日(十二・一一))
- * 台湾大地震救援募金 附属中一年C組〔読売(十二・一六)〕
- * 中学の音楽体験学習に出張演奏 滋賀大オーケストラ(毎日(十二・一八))
- * 「ネットデイ」開かれる―附属小・中学校(中日(十二・二)他)
- * 教育学部課程の改組 環境教育課程を新設(中日(十二・二五)他)
- 一月
- * 平成二二年度学生募集要項発表(近江同盟(一・一))
- * 教育学部長選任 石上三雄教授(毎日(一・七)他)
- * 環境教育課程新設(朝日(一・一三))
- * センター試験始まる(朝日(一・一六)他)
- * 教育問題の新拠点に 教育実践総合センター新設(京都(一・一八))

- * 国際交流会館が完成(京都(一・一九)他)
- * 経済学部長選任 成瀬龍夫教授(朝日(一・二九)他)
- * 四月から環境教育課程を新設(中日(一・三一))



中日新聞(2000年1月31日)



附属中学生も参加しての成端技術講習会

『しがだい』の編集に思う

大学は文化、科学の発展と教育にかかわる研究・教育者が集団をなすところです。ここには多様な分野にわたって日常的に研究と教育が営まれています。しかし、この大学で、どのようなことが、どのように進められているかを知ることがそう容易なことではありません。しかも、これまで国立大学の研究、教育に関する情報の公開はいずれの大学でも十分なされてきたとはいえない面が少なくなかったといわれています。

滋賀大学では、これまで『滋賀大学月報』『滋賀大だより』などの広報誌を刊行して本学で行っている研究、教育にかかわる情報の提供を行ってきました。しかし、昨春に広報委員会が発足し、本学でのこれまでの広報活動のありかたを再検討した結果、試みの一つとして2000年を迎え、新たな装いをもつ広報誌『しがだい』を刊行することで意見がまとまりました。

滋賀大学が所在する滋賀県は、古代では近江国と呼ばれ、奈良時代の中頃に作られた藤原氏の『家伝』に記された「武智麻呂伝」(藤原不比等の子)に、「近江国は宇宙有名の地なり。地広く人衆く、国富み家給ふ。東は不破に交り、北は鶴賀に接す。南は山背に通じて、この京邑に至る。水海清くして広く……」と記されており、じつに自然に、また交通に恵まれたところでした。滋賀大学が彦根市、大津市に置かれている自然的、人文的な環境もさほど当時と変わっていません。近畿圏にあって東海地域、北陸地域にも通じたじつに恵まれた環境で我々の研究、教育は進められているのです。しかし、古代と同じとのみいえません。異なる点の認識も重要です。

新たな広報誌は年に5号を刊行し、そのうち2号は学生委員会が主体に編集することになりました。この誌面には現在の滋賀大学をめぐる多様な環境のなかで行われている研究、教育と学生に関連する記事が満載されることになるでしょう。これまでの『滋賀大学月報』『滋賀大学だより』でも多くの情報を提供してきましたが、新たに分野を広げ、内容豊かな記事を書き載せるつもりです。ここには本学の過去の遺産と現在を基にしながら、未来につながるものが誌面に展開するはず。よき読者であるとともに、よき筆者であることをお願いします。

広報委員会 小笠原 好彦



発行日：平成12年3月1日
発行：滋賀大学広報委員会

〒522-8522

彦根市馬場一丁目1-1

(TEL: 0749-27-1172)

E-mail: koho@biwako.shiga-u.ac.jp

ホームページ: <http://www.shiga-u.ac.jp>